

Title	党、紅軍、農民(一)：閩西根拠地、一九二九年～一九三四年
Sub Title	The party, the red army, and peasants: The minxi base area, 1929-1934
Author	高橋, 伸夫(Takahashi, Nobuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.10 (2004. 10) ,p.1- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20041028-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20041028-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 党、紅軍、農民（一）

——閩西根拠地、一九二九年—一九三四年——

高橋伸夫

## 序論

第一章 閩西根拠地の概要

第二章 党組織

(1) 党員の補充

(2) 党内交通

(3) 党員の価値と行動様式

..... (以上本号)

第三章 紅軍への動員

(1) 農民と幹部——紅軍への加入をめくって

(2) 逃亡兵たち

(3) 地方武装と農民

(4) 土地改革は動員の梃子となったか

(5) モデル地区——上杭県才溪郷

結論にかえて——党権力と農民

..... (以上七七号一一号)

## 序論

中国共産党による革命を研究するものなら誰でも、党と農民の結合を重視せざるをえない。マルクス主義の名において生じたこの奇妙な同盟こそが、中国の共産主義者を勝利に導いた鍵であると目される限りで、この結合は入念な検討を必要としている。本稿の主たる関心も、まさにこの点に向けられている。共産党は農民大衆をいかに、そしてどの程度まで捉えることができたであろうか。党権力と農村社会の境界面（インターフェイス）の構造と性格はどのようなものであったか。これらの点を明らかにしたうえで従来中国革命史の基本的ナラティブに修正を施し、また新たに何かを付け加えることができるだろうか。これらの問題を、一九三〇年代前半に中国共産党が閩西（福建省西部）に構築したひとつの革命根拠地に焦点を当てて検討するのがこの小論の目的である。

研究史からいえば、考察対象とする地域を比較的狭く限定したうえで、党権力と農村社会の関係という視角から、両者の間の緊張や矛盾、そして言葉の真の意味での相互作用に焦点を定めるといふ研究スタイルは、比較的新しいといつてよいであろう。それはもちろん利用可能な資料——とりわけ地方党機関の実態を物語る資料——が不足していたためでもあるが、それだけではない。それは、より本質的には、研究者の問題設定のしかたに起因している。C・ジョンソンが一九六〇年代初めにペザント・ナシヨナリズム論を発表して以来、彼の結論そのものは幾多の批判にさらされたものの、研究者たちは彼の基本的な問題設定を引き継ぎ、そしてわれわれの視線は縛られてしまった。つまり、ジョンソンの議論以来、中国共産党と農民の広範で強固な結合は自明視され、そのような結合を生み出した究極の要因は何かという問題設定が支配的となったのである。党と農民との間に自然な利益の一致をみないT・カタオカの作品を例外とすれば、M・セルデンをはじめとするジョンソンの論敵たち

も、結論はジョンソンと大きく違っていたとはいえ、問題設定そのものは共通していた。しかし、一九八〇年代に入つて、K・ハートフォードと陳永発がそうした問題設定の前提そのものを大きく揺さぶつたのだつた。彼らは日中戦争下の中国の異なる地域を扱っているが、ともに、共産党は農民の圧倒的支持を受けていたわけではなく、むしろ農民の党に対する支持はかなり限定されていたと示唆したのである。<sup>(3)</sup>その後、研究者は（とりわけアメリカで活動する研究者たち）主として抗日戦争期における各革命根拠地の党権力―社会関係のどちらかといえどミクロな分析に向かい始め、いくつか実証的な研究が生まれたのだが、全体としての中国革命像を再構築できなまま今日に至っている。

筆者の意図もハートフォードや陳永発と同様、中国共産党と農民との強固な結合という図式を根本から問い直すことにある。その際、筆者はアメリカの研究者たちが好んで分析の対象にしてきた日中戦争の時期よりも前の一九二〇年代後半から一九三〇年代前半の時期に焦点を定めようと思う。共産党が農村に拠点を築き始めた時期の諸過程を観察することによって、党と農村社会の関係の「原型」にまでさかのぼつてこの問題を検討することが重要だと考えるからである。

分析の基本的な姿勢として、筆者は次の二つの点を――ある意味で当然のことだが、これまでの研究史からみて、研究者たちの共通の出発点というわけでもない――念頭に置いている。ひとつは、党指導者の言説から距離を置き、革命の現場の実態を可能な限り詳細に描いてみようということだ。われわれは、中国革命が途方もなく広大で多様性に富んだ地域で、しかも満足なコミュニケーション手段をもたない勢力によって推進された事実を重くみなければならぬ。党中央からの通信が、中国大陸に飛び石のように点在する各革命根拠地に、国民政府の厳しい弾圧の目をかいくぐつて、速やかに、そして完全な形で届いていたなどということは、どうみてもありそうにない。たとえ届いたとしても、それは多様な根拠地の実情に合わせて意味を変形されるのが常であつたと

想像できる。したがって、各根拠地で政策が実行に移されたとき、それが当初の意図から、少なからずかけ離れたものになる可能性が常に付きまとっていたのである。そこで、筆者は党指導者の意図や願望の分析——これが従来革命史研究の中心に置かれていたものであるが——ではなく、むしろ彼らの意図が現実に移される過程で生じる現実とのギャップ、およびそうしたギャップが意図せざる方向に集団を導く過程のほうに焦点を移してみたのである。

もうひとつは、農民の意志と主体性を回復してやろうということである。いかえれば、農民大衆を、たんに党の意志が貫徹されてゆく客体ではないと考えることだ。彼らが独自の意図と戦略をもって、「上から」与えられる党の政策を勝手に流用しつつ、党による支配空間に間隙を作ろうとする作用を認識しようということだ。

以上の二つの点を出発点とすれば、必然的に筆者の描く革命の空間は、従来描かれてきたものよりもずっと不確実性に富み、アナキーなものとなる。なぜなら、党の革命過程に対する統御能力を——ひいては党の歴史への介入能力を——相対的に低く見積もることになるからである。党中央が発した通信は地方党機関によって時に歪曲され、時に無視され、そしてそれを今度は農民が独自の計算に従って時に勝手に読み替え、時に便乗することだ。このことは中国革命の地理的もしくは空間的な多元性と多様性を強調することにつながると同時に、革命を一定の台本に従って、あらかじめ定められた結末に向かって進む芝居ではなく、実際にはどの方向に転ぶかわからないし、しかも誰がコントロールしているかもあまりはっきりしないような過程とみるイメージにつながってゆく。

当時、中国共産党が築いたいくつかの根拠地のなかから、福建省西部根拠地を選択した理由についても述べておくべきだろう。それは、ひとつには、すぐ後で触れるように、有用な資料である『革命歴史文件彙編』を、この地域については利用できるからである。しかも、この地域には、「社会民主党」に関わる大規模な肅清、紅軍

兵士の反乱、反羅明路線キャンペーン、査田運動など騒々しいいくつかの重大事件が起こるのだが、これらの事件が、深層に潜むものを映し出す鏡としての役割を果たしてくれると期待できるのである。さらにもうひとつの理由は、比較的観点からそれが重要だと考えたからである。以前、筆者は中央根拠地から比較的遠く離れた湖北省・河南省・安徽省の境界にある根拠地（顎豫皖根拠地）の党と農村社会の関係を検討した際、そこに「散漫な」党組織を発見し、それが党の運動に与えた可能性と限界を指摘したのだが、果たして自分の観察結果がどれほど当時の共産党の革命根拠地に共通する普遍的な妥当性をもつか確信を持つことができなかった。そこで、筆者はどうしても、自分のこれまでの観察結果を他の革命根拠地と比較しないではいられなくなったのである。その際、中央根拠地の一部である福建省西部根拠地を選択したのは、もし党中央の統制が最も強力なこの地域でも、党組織とその運動に顎豫皖根拠地と同様の特徴を発見できるなら、「散漫な」党組織はおそらく共産党の根拠地すべてに共通する特徴だと考えてよいであろう。先回りして結論を言えば、「散漫な」党組織という概念は、中央根拠地にも十分適用しうるものである。そして、筆者はこの概念を基礎にして、従来の中国革命史の理解を少なからず修正しなければならないと主張したのである。

資料についていえば、顎豫皖根拠地について調査を行ったときと同様、主として依拠したのは『革命歴史文件彙編』の福建省に関わる部分である。<sup>1)</sup>福建省西部根拠地に関するこの資料集にも、党中央や省委員会が各地に派遣した巡視員が記した報告書や、各県委員会が現地の実情について記した報告書、それから党の政策の実施を任された各大衆団体からの報告書などが大量に含まれている。この資料集をきわめて価値あるものにしてるのは、党中央から派遣された巡視員の「上からの視点」と、現地の県委員会の「中間からの視点」、さらには大衆団体の「下からの視点」といった具合に、様々な角度からの観察が集められていることである。そのために、革命現場の実態を再構成するためには、またとない材料なのである。

本稿では、まず福建省西部根拠地の概要について述べる。次に、この地域の党組織の特徴について、メンバーシップ、党内交通、党員の価値および行動様式という三つの角度から検討がなされる。続いて、当時の共産党がもつとも力を注いだ紅軍への動員について考察が加えられる。これによって、われわれは党の大衆動員能力が、どの程度のものであったかを見極めることができるであろう。そして、最後に、この狭い地域での観察結果を少し広い空間的、時間的文脈に接続しておこうと思う。

- (一) 中国革命の理解をめぐる主としてアメリカ人の知的軌跡については、以下の文献を参照された。Kathleen Hartford and Steven Goldstein, eds., *Single Sparks: China's Rural Revolutions* (Ammonk, N. Y.: M. E. Sharpe, 1989), pp. 3-33; Mark Selden, *China in Revolution: The Yenan Way Revisited* (New York: M. E. Sharpe, 1995).
- (二) Tetsuya Kataoka, *Resistance and Revolution in China: The Communists and the Second United Front* (Berkeley: University of California Press, 1974).
- (三) Kathleen J. Hartford, "Step by Step: Reform, Resistance, and Revolution in Chin-Ch'a-Chi Border Region, 1937-1945" (Ph. D. dissertation, Stanford University, 1980); Chen Yung-fa, *Making Revolution: The Communist Movement in Eastern and Central China, 1937-1945* (Berkeley: University of California Press, 1986).
- (四) 中央档案馆・福建省档案馆編『福建革命歴史文件彙集』(全二冊、以下『福建文件』と略す)、福州、福建人民出版社、一九八四年、および中央档案馆編『閩粵贛革命歴史文件彙集』(全三冊、以下『閩粵贛』と略す)、武漢、湖北人民出版社、一九八四年。

## 第一章 閩西根拠地の概要

閩西と呼ばれる福建省西部地域は、この論文が扱う時期、福建省西部の一二の県から構成されていた。面積はおよそ三万二千平方キロメートル、福建省全体の二三パーセントを占める。中国共産党の資料は、一九三〇年夏の時点で、この地域には二五〇万人の人口があり、八〇パーセント以上が農民で、流氓（ルンペン・プロレタリアート）が四パーセントを占めていたと記している。<sup>(1)</sup> 閩西は比較的自然条件に恵まれ、気候は穏やかで、雨量が多く、土地も肥沃である。主要な農産物に水稻、番薯、油菜、大豆、落花生、タバコ、茶などがある。また、竹、木材、紙の生産でも知られていた。<sup>(2)</sup>

この地域の人々は、一九世紀半ば、太平軍の蜂起による戦火が江南におよんだ際、これに呼応して立ち上がり、清軍と地主の私兵を打ち破った経験を有していた。また、辛亥革命に際しても、長汀、上杭、永定、武平等の同盟会グループがこれに呼応し、反清闘争に参加した。<sup>(3)</sup> したがって、中国共産党が農民の闘争を組織する以前に、国家権力と闘った経験を少なからずもっていたのである。実際、共産党が影響力を及ぼす以前から、農民による騒擾は珍しくなかった。傅柏翠——閩西における「社会民主党」の首魁とされた人物だが、経歴には不明な部分も多い——は上杭において農民運動が発展した理由として、村落が分散していて、地主相互の連絡が緊密ではなかったこと、そして一部の地主は自らも若いか、あるいは子弟が学校を卒業したばかりで、辛亥革命後の時代の潮流にさらされ、新しい思想と接触していたこと、さらに比較的開明的な地主が小作料の返還に応じたことをあげている。<sup>(4)</sup>

閩西における最初の共産主義者は、勉学のために廈門や広州に赴き、そこでマルクス主義の洗礼を受け、入党後に閩西に戻った若い知識人たちであった。彼らは、閩西に戻った後、革命の理念を主として地元の学校教師た



ちの間に広めていった。<sup>(5)</sup> 当時の、ある党内文書は、女性教員が党活動に熱心に取り組んでいると記している。<sup>(6)</sup> 閩西で共産党員が陸統と誕生するのは、一九二五年一月に開かれた中共第四回党大会以降のことであった。広東において、澎湃や毛沢東が主催する農民講習所が、閩西党員を育てる揺り籠となっていた。<sup>(7)</sup> 党員数の増加を受けて、一九二六年夏から二八年にかけて、永定、上杭、平和、竜巖、長汀などの県で党県委員会が成立した。<sup>(8)</sup> 福建省全体を眺めれば、党員は農村でしか増えなかった。厦門や福州といった比較的大きな都市のある沿海部は、国民政府による厳しい弾圧によって、党組織はほとんど成長できなかった。ある党内文書によれば、一九二八年八月当時、福建省全体の党員数は四、〇〇〇名程度であったが、省委の所在地である厦門にはわずか四〇名を数えるのみであった。<sup>(9)</sup> 国共合作が潰えた一九二七年夏から翌年春にかけて、これらの生まれたばかりの党組織は、他の地域の党組織と同様、一連の武装蜂起に打って出た。彼らは、いくつかの県を数ヶ月間支配下に置くことに成功したものの、結局は国民政府の軍隊によって鎮圧されてしまった。だが、一九二九年春に転機が訪れた。毛沢東と朱徳に率いられた紅四軍が三度にわたって閩西に進攻することによって、広大な地域が再び共産党の支配下に置かれたのである。ソビエト政権が県、区、そして村レベルで次々に作られ、土地改革——それはおよそ整然と行われたものではなく、混乱に満ちたものだったが——をはじめとするさまざまな社会改革が試みられた。同年七月には、最初の閩西共産党大会が上杭で開催され、この地域の最高指導機関である閩西特別委員会が成立した。<sup>(10)</sup>

この大会を主宰した毛沢東は席上、閩西には八〇万人の立ち上がった農民と三千人の党員がいると述べている。<sup>(11)</sup> 公式の党史の語るところ、一九三〇年夏に至るまで、閩西根拠地は安定した状態にあった。閩西の党員数は同年七月には七、七五六人に達し、福建省の党員数の九〇パーセントを占めた。<sup>(12)</sup> だが、間もなく党中央で冒險主義的な「李立三路線」が始まると、閩西の党も騒然とした雰囲気包まれた。同年七月、閩西の紅一二軍は、他の主力紅軍とともに、長沙攻撃に向けて出発した。そのため、閩西に残る紅軍は二一軍のみとなったが、二一軍も

また広東省東江の攻撃に失敗し、その後繰り返された一連の攻撃も目も当てられない敗北に終わった。<sup>(13)</sup> 敵が包圍討伐作戦を開始するなか、紅軍兵士の逃亡が相次ぎ、根拠地は縮小した。<sup>(14)</sup> その間、党組織を急速に拡大しようとしたことから、多くの「不良分子」が党内に混入し、「組織はたるみ、紀律はほとんど破産してしまった」<sup>(15)</sup> とされる。同年一月の福建省ソビエトによる報告は、永定、竜巖の二つの県域にのみ党組織があるものの、その他の多くの県域は敵に占領されていると記している。<sup>(16)</sup> そして、一二月には、ついに閩西根拠地の「首都」である竜巖城も失われた。<sup>(17)</sup>

閩西における「李立三路線」は、惨憺たる結果だけを残し、一九三〇年一月中旬に複数のルートを通じて届けられた中共六期三中全会の決議によってようやく幕を閉じた。<sup>(18)</sup> だが、党組織には、立ち直るための十分な余裕は与えられなかった。というのも、一九三一年春から秋にかけて、根拠地全体に肅清の嵐が吹き荒れたからである。この大規模な肅清は、筆者が以前検討した顎豫皖根拠地と同様、当時、共産党の革命根拠地すべてを襲った肅清の一部であった。それは、新たに党中央を掌握した王明を中心とする新指導部が、「李立三路線」による党組織と運動の混乱の後、中国各地に点在する革命根拠地すべてを自らの完全な統制下に置こうとする意志に関わっていた。とはいえ、閩西における肅清を語る際には、地方的な要因にも言及しなければならない。閩西の黨員たちは、地理的に近接していたために、江西省の根拠地におけるA B 団肅清の影響を受けていた。とりわけ、彼らは一九三〇年一二月に起こった富田事件<sup>(19)</sup>——これは共産党史上、もつとも騒々しい「反革命」事件だったのだが——の後、反革命活動について、非常に敏感に、あるいは過敏になっていった。公式の党史は、富田事件が発生した際、閩西の紅軍内でも、丘弼琴や傅柏翠などによる裏切りや分裂活動が現れたとしている。<sup>(20)</sup> しかも、この時期は、国民党が閩西を含む中央根拠地に対して、第二回目の人ばかりな包圍討伐作戦（圍剿）を行っている最中であった。このことが、閩西根拠地内に必ずや潜んでいると思われる反革命分子の活動に対する党指導者たちの警戒心

をさらに高めたのであった。さらにいえば、反革命分子の肅清が、逼迫していた資金の調達工作与結びついていた可能性も排除することができない。<sup>(21)</sup>

この肅清の起源が何であれ、その規模は空前のものとなった。閩西ソビエト政府三五名の執行委員および同候補委員のうち過半数が肅清され、紅一二軍の幹部も半数以上が肅清された。また、「数千人の人々が誤って殺された」という。<sup>(22)</sup>別の記述によると、犠牲者の数は六千人にのぼった。<sup>(23)</sup>その結果、閩西の黨員数は約半数にまで激減してしまった。閩粵贛省委の報告は次のように述べている。「永定、竜巖、杭武、汀連などの県では、過去の県委と区委の責任者が一人残らずいなくなった。……竜巖の大池、小池——これら二区には二〇余の支部があつて、本来四〇〇から五〇〇人の同志がいたのが、一〇〇人ほどしか残っていない。……黨員は過去八千人いたのが、現在ではおそらく四千人に満たない。……これまでの県委、県ソビエトの責任者で残っているのは一〇分の一以下であり、区委、区ソビエトの責任者は、せいぜい一〇分の三が残るのみである」。<sup>(24)</sup>『中国共産党福建省組織史資料』に記載されている各党県委員会の名簿を辿つてゆくと、この肅清を生き延びた地方指導者がたしかにほんの一握り（その一人が張鼎丞であつた）にすぎなかつたことがわかる。

残念ながら、この驚くべき規模の肅清を詳細に考察するには、資料が不足している。したがって、この革命陣営を浄化しようとする試みがどの程度党外の大衆を巻き込んだ運動であつたか、また根拠地の社会からどれくらいの反発を引き起したのかははっきりしない。一九三一年五月下旬には、肅清に対する不満から、坑口にあつた閩西ソビエト政府直属の第三大隊が反乱を起こしたとされるが、われわれが知りうることはごく限られている。<sup>(25)</sup>利用できる数少ない資料が示唆するところ、(一)五月二十七日夜に坑口第三区で「社会民主党」が暴動を起こした。この暴動に第三大隊が加わつた。同区ソビエト機関内の「社会民主党」分子もこれに呼応した。(二)反乱分子は閩西ソビエト政府が派遣した巡視員、および区ソビエト主席を拘束し、区ソビエトの印章、文献、金銭を

すべて持ち去った。(三) 暴動は三日間で鎮圧された。(四) 暴動鎮圧後の数日後に、東五区においても同様の暴動計画が発覚した。<sup>(26)</sup> おそらく、この反乱は、閩西の党指導者たちを驚愕させ、さらなる肅清の強化へと彼らを導く結果になったであろう。ともかく、肅清が招いた混乱から、同年春から秋にかけて根拠地は大きく縮小し、中共閩贛特委と閩西ソビエト政府も竜巖虎崗から上杭白砂に移ることを余儀なくされた。<sup>(27)</sup>

苛烈な肅清は一九三一年四月から七月において頂点に達し、事態を憂慮した中央ソビエト政府や党中央からの警告にもかかわらず、すぐには収まらなかった。公式の党史によれば、同年一月初旬、第一回全国ソビエト代表大会が瑞金で開催された際、郭滴人と張鼎丞が毛沢東に対して閩西における肅清について報告したところ、毛から叱責され、ただちに「社会民主党」の肅清を停止するよう命じられた。また、党中央も翌年一月二日付けで閩粵贛省委に書簡を送り、肅清における誤りを批判したという。そして、三月、閩粵贛省委は第二回閩西党大会の席上、「社会民主党」肅清に関する厳格な点検を行い、「ここに誤りは基本的に修正された」とされる。<sup>(28)</sup> とはいえ、それ以後も、反革命肅清工作を怠つてはならないとの指示が出されていることからみて、<sup>(29)</sup> 肅清は間欠的に繰り返され、一九三三年の反「羅明路線」下の肅清に引き継がれていったようにみえる。

閩西の党が肅清に熱を上げている間——肅清にもかかわらず、というべきだろうか、それとも肅清が根拠地内部の抗戦力を高めたため、というべきだろうか——中央根拠地は国民政府軍の攻撃によく耐えていた。一九三一年九月、ソビエト区中央局は国民党による第三回包圍討伐作戦の撃退を宣言することができた。一九三二年春には、紅一二軍が上杭から武平に進軍するに伴い、失われた地域は回復された。<sup>(30)</sup> 同年夏には、閩西の根拠地は竜巖、上杭、永定、平和、連城、漳平、寧洋、長汀、武平、寧化、清流、帰化など一〇以上の県を含み、「かつてなかったすばらしい局面が現れた」のであった。<sup>(31)</sup> おそらく、この時点が閩西紅軍および根拠地の最盛期であったろう。<sup>(32)</sup> だが、同年六月に蒋介石が第四回目の包圍を開始すると、風向きは瞬く間に変わった。同年一〇月、国民政府の

一九路軍は竜巖はじめ八県を奪い返してしまつた。<sup>(33)</sup> こうして、またしても危機が訪れ、閩西の党指導者たちの主たる関心は発展というよりは生存の確保に向けられた。国民政府軍からの攻撃を耐え抜くためには、現有の兵力では明らかに不十分だと判断された。そして、大掛かりな紅軍の拡大キャンペーンが熱を帯びた。

このキャンペーンは、「百万の鉄の紅軍を作り上げよ」とのスローガンを掲げて行われた。だが、猛烈な動員は、党内からもさまざまな批判を招いた。そうした批判を提起した人物の一人が、福建省党委員会代理書記の羅明であつた。彼は、兵員拡大それ自体に反対したわけではなかつたが、拡大の方法、およびその非現実的目標について強い疑念を表明したのであつた。羅明が省委に宛てた書簡に記すところ、「省委は過去の計画において、いずれも機械的に永定が紅軍をこれだけ拡大しなければならぬと定めてきたが、これはよくなかつた」<sup>(34)</sup>。彼こうした控えめで現実的な提案は、あくまでも戦闘的な姿勢を掲げる党中央の目にとまり、すぐに「日和見主義路線」を歩むものとして批判された。<sup>(35)</sup> そして、一九三三年二月以降、新たな肅清の波が反「羅明路線」闘争の下で根拠地全体を捉えることになる。その結果、一年足らずのうちに、省委書記、各県委、各ソビエトの幹部が「走馬灯のように取り替えられた」<sup>(36)</sup>。これによって、一九三二年の肅清をかううじて生き延びたわずかな数の幹部たちも打撃を受けたのだつた。

一九三三年という年は、「反羅明路線」だけではなく、査田運動によつても特徴付けられる。この運動は、もともと複合的な目的で開始された。すなわち、土地問題の解決、地方ソビエト機関の改造、農村における反革命勢力の肅清、農業・手工業生産の回復、合作社の発展、生産物と消費物資の調整などの目的である。<sup>(37)</sup> よく知られているように、毛沢東もこの運動の推進に力を注いだ。彼には、農村社会に深く根を下ろした諸関係や觀念が、たんに一度や二度の土地分配によつて、根本的に変革されるのではないことがよくわかつていた。どこか後の文化大革命を思わせる表現を用いて、毛は「仮面をかぶつた」一目見てすぐにわからない敵を発見し、それを除去

するように呼びかけたのであった。<sup>(38)</sup>

しかし、実際には、共産党はこれらのキャンペーンにじっくり取り組む余裕はなかった。というのも、国民党の軍隊がすぐそこまで迫っていたからである。蔣介石による第五回目の包囲討伐作戦は、それまでのものと比べれば、はるかに周到に計画されたうえで、一九三三年一〇月に開始された。この作戦は、一月の第一九路軍による福建人民政府の樹立という幕間劇により一時的に中断を余儀なくされたものの、翌年一月以降、本格的に展開された。閩西根拠地はもはやこの攻撃に耐えることができなかつた。国民党の軍隊は、四月に竜巖、新泉一帯を占領すると、六月までに永定、上杭、武平、連城などを支配下におさめた。同年一〇月に紅軍の主力が中央根拠地を脱出した後、いくらかの戦力が遊撃隊として残され、国民党の支配を攪乱した。遊撃隊は党中央とほとんど連絡が途絶えてしまったが、彼らが生存と活動を続ける社会的基盤および自然環境は失われてはいなかつた。張鼎丞らは、残されていた党組織と遊撃隊の断片をかき集め、福建特有の急峻な山岳地帯や、山林、竹林などに潜みつつ遊撃活動を展開することができた。しかも、張によれば、「保長、地主、富農は金を払えば食料を売ってくれた」のであった。<sup>(39)</sup>だが、閩西根拠地それ自体は一九三四年の春から夏にかけて、もはや過去のものとなつたのである。

- (1) 中共竜巖地委党史資料徵集研究委員會『閩西革命根拠地史』、北京、華夏出版社、一九八七年、一頁。
- (2) 同右、一頁。および、「中共閩西第二次代表大会日刊」（一九三〇年七月八日至二〇日）、江西省檔案館・中共江西省党校党史教研室選編『中共革命根拠地史料選編』（以下、『選編』と略す）上、南昌、江西人民出版社、一九八二年、二七八頁。
- (3) 前掲『閩西革命根拠地史』、五頁。
- (4) 傅柏翠「土地革命初期上杭北四区農民武装闘争」、中国人民政治協商会議・福建省委員会文史資料研究委員会編

- 『福建文史資料』第七輯、福州、福建人民出版社、一九八三年、二頁。
- (5) 前掲『閩西革命根拠地史』、五頁。張鼎丞『中国共産党創建閩西革命根拠地』、北京、人民出版社、一九八二年、六一七頁。張によれば、永定城郊外の溪南区の大多数には小学校があつたが、教師の絶対多数は共産党員、もしくは共産主義青年団員であつた(同上、七頁)。
- (6) 「陳国柱給孟冰、峻山的信」(一九二六年三月八日)、『福建文件』(補遺)、二二頁。
- (7) 前掲『閩西革命根拠地史』、一一二二頁。
- (8) 同右、一四一五頁。
- (9) 「元和致云光信」(一九二八年八月一〇日)、『福建文件』(補遺)、五二頁。
- (10) 張鼎丞、前掲書、二七一三〇頁。および、「紅軍第四軍状況」(一九二九年七月八日)、『選編』中、四九九頁。
- (11) 前掲『閩西革命根拠地史』、一一九頁。
- (12) 「中共閩西党第二次代表大会日刊」(一九三〇年七月八日—二〇日)、『選編』上、三一七—三一八頁。および、陳榮華・何友良『中央蘇区史略』上海、上海社会科学学院出版、一九九二年、四七頁。
- (13) 張鼎丞、前掲書、四五—四七頁。紅二軍は、同年一二月頃、紅二〇軍と合併して、(新)一二軍と命名された。(左権、施簡報告」(一九三〇年二月二九日)、『福建文件』(閩西)、二四四頁)。
- (14) 張鼎丞、前掲書、五三頁。
- (15) 前掲『閩西革命根拠地史』、一三七頁。
- (16) 「閩西蘇維埃政府通告第×号」(一九三〇年一月二八日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三〇年)、二八三頁。
- (17) 張鼎丞、前掲書、四九頁。
- (18) 前掲『閩西革命根拠地史』、一三九頁。および、「杜××自閩西給南方局信」(一九三〇年一月一日)、『福建文件』(閩西)、一九〇頁。なお、三中全会の決定に基づき、同年一二月に閩西、東江の二つの特別委員会が合併され、閩粵贛特別委員会が成立した。この委員会はずぐに閩粵贛省委員会と改称され、次いで一九三二年三月には、福建省委員会と改称された。孔永松、林天乙編著『閩贛路千里——紅軍転戦閩贛与創造閩西根拠地的闘争』上海、上海人民出版社、一九八二年、二二六頁。

- (19) 小島朋之氏は、富田事件について、それがたんに革命路線上の対立ではなく、土着派である江西省出身者集団と、毛沢東を先頭とする大部分湖南省出身者の集団との間の地方主義的対立という側面をもっていたと指摘している（『中国政治と大衆路線』慶應通信、一九八五年、六二頁）。
- (20) 前掲『閩贛路千里』、一六六頁。
- (21) 紅四軍政治部の「資金調達必携」には、「したがって、われわれは資金調達と反革命肅清とを結びつけなければならない」と記されている。「労農紅軍第四軍政治部資金調達必携」（一九三二年一月一日）、日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』（以下、『資料集』と略す）第五卷、勁草書房、一九七二年、三九六頁。この文書は、「疇款問題訓練大綱——中国工農紅軍十二軍政治部」（一九三二年三月）、中共福建省委党校党史研究室編『紅四軍入閩和古田会議文献資料』、福州、福建人民出版社、一九七九年、一三三—一三五頁の内容に極めてよく似ている。ただし、後者には、資金調達と反革命肅清を積極的に結びつけよとの文言は見当たらない。
- (22) 前掲『閩西革命根拠地史』、一四五—一四六頁。および、前掲『閩贛路千里』、一七四頁。
- (23) 中共福建省委組織部・中共福建省委党史研究室・福建省檔案館『中国共産党福建省組織史資料』、福州、福建人民出版社、一九九二年、一一四頁。
- (24) 「中共閩粵贛省委報告第十四号」（一九三二年八月二〇日）、『閩粵贛』（一九三〇年—一九三一年）、二五〇頁。『閩贛路千里』の記述によれば、党員数は八千人から五千人に減少した（一七四頁）。
- (25) 前掲『閩西革命根拠地史』、一四五頁注。
- (26) 「閩西蘇維埃政府通知第五十二号」（一九三二年五月三〇日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三一年—一九三三年）、一〇三頁。および「閩西蘇維埃政府通告第二十八号」（一九三一年六月五日）、同右、一一—一三頁。なお、この頃、一大隊は九〇人によって組織されるはずであった（『閩西蘇維埃政府通告第十五号軍字第一号』（一九三一年一月一日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三二年—一九三三年）、七一—九頁）。
- (27) 前掲『閩西革命根拠地史』、一四六頁。これらの機関は、さらに一九三二年一月に長汀城に移った。「閩西蘇維埃政府通知第一〇六号」（一九三二年一月二二日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三一年—一九三三年）、一九六頁。



- (28) 前掲『閩西革命根拠地史』、一四六一―一四七頁。なお、一九七八年一月に開かれた二期三中全会の後、福建省委は「社会民主党」肅清が「完全に誤り」であったことを認め、関係者の名誉回復を行った(同右、一四七頁)。「閩贛路千里」は、「閩西地区にはもともと社会民主党のいかなる組織も存在しなかったし、またいかなる社会民主党分子もいなかった」としている(一七〇頁)。だが、そうなると、なぜこれほどの規模の肅清が生じたのだろうか。また、坑口暴動はたんなる内紛だったのだろうか。この興味深い問題は、今後の検討に委ねるよりほかはない。
- (29) 例えば、「福建省蘇維埃政府訓令第二十五号」(一九三二年一月一九日)、「福建文件」(蘇維埃政府文件一九三一年―一九三三年)、三六五―三六八頁を参照のこと。
- (30) 周恩來「紅軍十二軍占領杭武的意義」、「紅色中華」第二期(一九三三年三月二日)。
- (31) 前掲『閩西革命根拠地史』、一五〇頁。
- (32) 宍戸寛『中国紅軍史』河出書房新社、一九七九年、二六一頁。
- (33) T・K生「閩西八県回復後の情形」(一九三三年四月二七日)、波多野善大『中国共産党史』第三卷、五四―五五頁。
- (34) 羅明「对工作的幾点意見」(一九三三年一月二日)、『選編』中、三八〇頁。
- (35) そうした批判の代表的な文書としては、洛甫「羅明同志の日和見主義路線とはどんなものか」(一九三三年二月一日)、『資料集』第六卷、二〇九―二一七頁がある。
- (36) 前掲『閩西革命根拠地史』、二〇七―二〇八頁。
- (37) 中華ソビエト共和国中央人民委員会「訓令第一号——広く深く査田運動を實行せよ」(一九三三年六月一日)、『資料集』第六卷、一九七頁。
- (38) 毛沢東の査田運動に関する基本的な構想については、「査田運動は広大な区域における中心的な重大任務である」(一九三三年六月一日)、『資料集』第六卷、三二―三三―三六頁を参照のこと。
- (39) 張鼎丞、前掲書、七六一―七七頁。彼は、遊撃隊の数を四千人としている(同右、八一頁)。

## 第二章 党組織

次に、党組織の検討に移ろう。以前、顎豫皖根拠地に関する分析で行ったように、党員の補充、党内交通、および党員の価値と行動様式という三つの側面から検討を加えようと思う。結論をあらかじめ述べておくなら、われわれはここでも思いのほか開放性が高く、凝集性が低く、構成員の流動性が高く、そして人的にも、文化的にも境界線の曖昧な組織を見出すのである。

### (1) 党員の補充

多くの党内文書が示すところ、顎豫皖根拠地の場合と全く同様に、党規約に定められた正規の入党手続きはほとんど顧みられなかった。多くの党員は、何らの入党手続きも経ることなく、個人的つながりによって、つまり誰その親類やら友人だということ、芋づる式に入党していた。閩西特委の文書によれば、「同志の紹介はいかげんで私的な感情によっている。〔正規の〕紹介手続きに基づかず、……だから紹介された同志の多数は何もわかつていない<sup>(1)</sup>」。その結果、一九三二年二月の福建省党委員会の報告書が示すように、いくつかの県では、同志たちのすべてが互いに顔見知りであった<sup>(2)</sup>。つまり、農村社会の住人がバラバラに入党するのではなく、アスクリブティブな紐帯によって、すでに結びついた人々が集められていたのである。その際、党規約が要求する疑わしい分子のスクリーニングは、ほとんど機能していなかった。共産主義青年団についても、事情はまったく同様であった<sup>(3)</sup>。

しかも、入党後、少なからずの党員は党支部に編入されることもなく、彼らの生活は入党前とほとんど変わらなかった。一九二九年、紅四軍が閩西に進攻した直後に、ある党内文書は次のように述べる。「過去、多くの同

志は入党して数カ月間、支部に編入されず、一切の行動は完全に自由で、党が何であるかも知らなかった。今では比較的よくなった<sup>(4)</sup>。ところが、一年を経過しても、相変わらず同じような観察がなされている。「閩西党組織は、一貫してたいへん散漫だ。……同志による新黨員の紹介は大変簡単で、紹介手続きに基づく場合は少ない。……そのため、党〔員〕の一切の行動は自由で、会合に出ず、党費を納めない。党はこれにかまわない。その結果、黨員は無組織で勝手に動く<sup>(5)</sup>」。

党指導部も、こうした黨員の補充様式が抱える問題点を認識していなかったわけではない。しかし、黨員の質的向上を呼びかける声は、量的増大を求める声に圧倒されていた。あるいは、包含することよりも排除することから組織的強さを引き出そうという発想はほとんどなかった<sup>(6)</sup>。というのも、国民党からの攻撃の危険に絶えずさらされながら、しかも後に述べるように黨員の流動性がかなり高かったために、党指導部は、つねに黨員の減少あるいは枯渇の不安を抱えていたからである。そのため、黨員の質よりも量がまず優先されたのであった。通常、危機状況は集団の凝集力を高める方向に作用するはずであるが、この場合、むしろそれを抑制する方向に作用していたのである。

では、党に加入したのは結局いかなる人々なのだろうか。黨員の年齢や学歴、党歴や社会的背景を物語る資料はごく限られている。そうした資料のうちの一とつが、一九三二年四月に福建省委書記の羅明が党中央組織部に宛てた、省、市、県レベルの幹部四二名に関する調査報告である。この報告によれば、四二名の階級成分は、知識人(大学卒あるいは在学中、および中等学校卒業者)二七名(六四・三パーセント)、労働者一三名(三二・〇パーセント)、農民一名(二・四パーセント)、不明一名であった。また、年齢が判明する者一五名の平均年齢は二六・三歳、入党時期がわかる者二五名から割り出される党歴は、平均四・七年であった<sup>(7)</sup>。明らかに、学歴のある若い知識人が指導的地位を占めていた。彼らの浅い党歴をみれば、彼らが豊富な活動経験のゆえに指導的地位に拔擢

されたのではないことが理解できる（もし一年後に羅明が同じ報告を提出していれば、肅清によつて幹部の顔ぶれは大幅に入れ替わっており、党暦の平均値はさらに下がったであろう）。彼らの地位は、知識人同志の個人的つながりや、読み書き能力に基づく文化的優越に基づいていたようにみえる。

羅明はこの書簡において、県レベル以下の下層幹部は、しばしば改名を行うため、また労農黨員はさまざまに現地名をもつため、彼らに関する統計調査を行うことは困難だと示唆している<sup>(8)</sup>。実際、一般黨員の社会的背景や年齢、党暦などについて、党内文書はほとんどの場合、一般的な傾向を語っているにすぎない。それらは、一方で党内に農民の成分が多すぎることを、他方で地主や富農が党内の隊列に紛れ込んでいることを繰り返して指摘している。地主や富農だけではない。流氓（ルンペン・プロレタリアート）がソビエトを取り仕切っているとすると報告も少なくない<sup>(9)</sup>。少なくとも、一九三〇年を迎えるまでは、福建省の党と紅軍は流氓に積極的な接近を試みていたから、これも大いにありうることである<sup>(10)</sup>。共産主義青年団もまた、団内の「分子の複雑さ」を指摘していた<sup>(11)</sup>。青年団閩西特委が一九三〇年九月に発した「組織問題決議」によれば、閩西の青年団は八〇パーセントが農民と知識人で占められ、一〇パーセントが労働者で占められるが、農民の間には富農が紛れ込み、また労働者の多くも「独立労働者」であった<sup>(12)</sup>。したがって、黨員の出身階級・階層を限定しようとする党の意図にもかかわらず、黨員の社会的背景は多様であったと考えたほうがよいであろう。出身階層別の比率を具体的な数字で示すことはできないにしても、地主や富農が、貧農、雇農、「労働者」とともに、さらには各種ごろつきや流氓とともに黨員証を手にしていたようにみえるのである。われわれはここに外来の権力に対して積極的な抵抗を試みるよりは、可能ならば権力集団の内部に潜り込んでしまおうとする農村の住人たちの戦略を見出すのである——とはいっても、筆者は、そうした戦略が階級別に採られていたとは考えていないが。黨員（および共産主義青年団）の隊伍は、それが根を降ろそうとした農村社会の階級構成をそのまま反映していたといえはいいすぎであろうが、それ

でも一種の階級的雜居状態として把握しように思われる。

さて、革命に身を投じる覚悟もなく、また党に關してほとんど何の予備知識も持たずに入党した人々が、次々に党から離れていったのは当然の成り行きであった。閩西特委の報告によれば、「同志が党に除名してもらおう望んだり、自ら党を離脱したりするなどの現象はつねにある」のだった。<sup>(13)</sup> そのため、党組織の構成員の流動性は相当大きくなっていった。次の記述は、党中央が派遣した巡視員が記した福州中心县委に關する報告の一部であるが、おそらくは、閩西根拠地の状況にもあてはまるものである。「以前、多くの同志は支部を組織していなかった。一カ月前、福州には三〇数名の同志がいたが、正式な支部はひとつもなかった。こうした組織上の散漫さが、党の指導のおよばない最大の原因である。多くの同志が今日入党したかと思えば、明日党を出て行く」<sup>(14)</sup>。

組織の流動性は、党それ自身のみならず、黨員予備軍たる共產主義青年團をも特徴づけるものであった。ある資料は、一九三三年前半における共產主義青年團への入團キャンペーンの成果を分析して、次のように結論づけている。長汀では、前年末までの团员二、九一八名に、同年一月から四月までの「春季突擊期間」中に獲得した四七〇名を加えて、三、三八八名となるべきところ、一、八八六名しかおらず、この間、一、五〇二名が青年團を去った。<sup>(15)</sup> 共產主義青年團だけではない。後述するように、紅軍、および遊撃隊や赤衛軍といった地方武装も流動性の高さという点では、同様であった。おそらく、大衆団体も含めて中国共産党が閩西の農村で築き上げた（少なくとも彼らがそう称した）組織のほとんどすべてが構成員の高い流動性によって特徴づけられていたのである。

このような流動性の高さは、入党の容易さに関係していただけでなく、ほかにもいくつかの要因があった。第一は、党組織が置かれていた政治的・軍事的文脈である。国民政府軍（あるいは地方軍閥、匪賊）による攻撃、および逮捕はしばしば黨員を組織から奪い取っていった。第二は、党自らが作り出した要因、すなわち党内で吹き

荒れた肅清の嵐であった。閩西における県党委員会の名簿を辿ってゆくと、一九三一年、および一九三三年の肅清を生き延びた者は、ごくひと握りに過ぎなかったことがわかる。試みに、竜巖、永定、上杭の三つの県党委員会メンバーの変遷をみるなら、一九二九年一月から一九三三年一月まで、一年以上委員会にとどまっていたものは、わずか五人しか見当たらないのである。<sup>(16)</sup>この二度の肅清の波によって、閩西の党幹部はほとんど入れ替わってしまった。もちろん、肅清の対象となったのは幹部に限らなかつた。

そして、第三の要因は病気である。比較的長い歴史的文脈からいえば、福建省は一九世紀の末、一八九六年から一九〇二年にかけて、ヨーロッパから香港、厦門を経由して入ってきたペストの大流行に見舞われた。そして、この恐ろしい病気は、一九四二年から一九四六年にかけてもう一度大流行した。ある研究は、この二度の流行で、合計七十一万人が死んだと推計している。<sup>(17)</sup>この小論が扱う時期は、この二度の大流行の谷間に当たるのだが、閩西のあちこちで小規模で散発的な流行があつた可能性がある。ペストだけではなかつた。国共両党の間で戦争が長期化するにつれ、埋葬されない兵士の死体があちこちに転がり、腐乱し、様々な伝染病を媒介していた。<sup>(18)</sup>資料に見られる流行を報じられた伝染病名だけでも、コレラ、赤痢、痘瘡、脳脊髓膜炎、マラリアなどがある。<sup>(19)</sup>詳細は不明だが、長汀県童坊区では、伝染病で八百人が死亡する事件が生じたと報じられた。<sup>(20)</sup>また、紅一二軍後方総醫院で死亡する者のうち、伝染病患者が六〇から七〇パーセントを占めると報告されている。<sup>(21)</sup>

さらに、第一回の閩西党大会がそうであつたように、党大会を開くと、用意された宿舎と食事が不衛生であるために、多くの病人が出るがあつた。毛沢東もこの大会に参加していたが、マラリアにかかり、しばらく活動不能に陥つた。<sup>(22)</sup>これらのさまざまな病気が、党組織から人的な継続性を、そして蓄積されるべき経験を奪い去つていたのである。<sup>(23)</sup>一九三〇年初め、閩西特委の文書は、閩西の党が幹部の病のために工作が停頓し、すでに「豆腐党」になつてしまつたと評していた。<sup>(24)</sup>顎豫皖根拠地においても、病気は黨員にとつて国民政府軍に劣らな

い恐るべき敵であったが、閩西の暑く湿った気候を考えるなら、おそらくそれは顎豫皖根拠地の場合以上に、党組織にとつて手に負えない敵であった。

このような組織構成員の移ろいややすきを前提とすれば、先に述べたような入党の際の緩やかな資格審査、したがって党組織の比較的高い開放性は、組織の構成員を枯渇させないための合理的な対応であったとみることも可能である。だが、緩やかなスクリーニングは、翻つて、本来党組織に馴染まない分子を多数党内に混入させることになり、結局、組織の流動性を高める結果となつたであろう。

## (2) 党内交通

中央ソビエト政府は、顎豫皖根拠地に対する指導と福建省の根拠地に対する指導を比較して、次のように書いている。「顎豫皖、……等は、いうまでもなく一層遠く、直接連絡の取れなくなる場合がしばしばある。したがって、政治上の指導のほかに、工作上的指導も困難となつている。……中央政府は江西、福建、および瑞金に対しては、つねに彼らの工作进行を指導し督促している<sup>(26)</sup>」。この言明は正当なものである。たしかに、党中央および中央ソビエト政府からの情報伝達に関していえば、閩西は顎豫皖根拠地よりも有利な状況に置かれていた。だが、それでも党中央からの通信は、閩西に届くまでに、普通、数カ月を要した。一九二八年夏にモスクワで開催された中共六大会の諸決議が閩西に届けられたのは、四カ月から五カ月後のことだが、それらがあらためて印刷に付されて根拠地内に行き渡るにはさらに約五カ月を要した。「李立三路線」の事実上の綱領となつた一九三〇年六月一日の政治局決議「革命の高まりと一省数省首先勝利」に呼応した閩西特委の文書は、筆者の知る限り、同年八月一日まで見出すことはできない<sup>(28)</sup>。そして、この冒險主義的路線を修正すべく一九三〇年九月下旬に開催された三中全会の一切の文献が閩西に届いたのは、一二月初旬のことであつた<sup>(29)</sup>。したがって、皮肉にも、党中

央が「李立三路線」の克服に乗り出したまさにそのときに、閩西はその実現に向けた努力を開始したのであった。たんに情報伝達の問題があっただけではない。情報の欠落もまた問題であった。廈門に置かれていた福建省委を經由した交通は、同委員会内部の目も当てられない混乱、および破壊によって、信頼の置けないものになっていた。<sup>(30)</sup> とりわけ、一九三一年三月二五日の国民党による機関の破壊は、同省委から文献、通信物、金銭などをほとんど奪い去ってしまった。<sup>(31)</sup> 上杭に置かれていた福建省ソビエトは、もう少し信頼に足る党内交通の中継地点であったようにみえる。だが、そこにおいても、中華ソビエト共和国中央政府から速達で送られた決議文が、紛失してしまうような事態が生じていたのだ。<sup>(32)</sup>

党内の情報伝達に伴う困難にさらに拍車をかけたのは、県委員会以下のレベルにおける幹部の間での、積極的  
に情報を上から受け取り、下に伝達する姿勢、言い換えれば、組織全体における情報の共有を重視する姿勢の欠如であった。党中央から派遣された巡視員の廈門市委員会に関する報告によれば、「中央の失業運動に関する決議および失業運動日に関する決議は下層の支部と大衆に伝わっていないだけでなく、市委では討論すらされておらず、多くの責任者でさえ読んでいない」。<sup>(33)</sup> 安溪中心县委からは、当地の遊撃隊員たちによって、党の機関紙が、もっぱら紙巻タバコを作るために使われているとの報告がなされている。<sup>(34)</sup>

かくして、党中央で発せられた通信を、基層に置かれた支部が目立った遅れもなく、しかも完全な形で受け取  
ることはほとんど不可能であった。閩西特委は次のように述べる。「党の戦略は速やかに支部に到達して詳細に  
報告されることがない。ただ上級の発送を担当する同志が文書を下に発送し、それが支部書記の穀物袋のなかに  
たまるだけだ」。<sup>(35)</sup> 上から工作に関する指示が経常的になされないため（なされたとしても事態が大きく変わったかど  
うかは疑わしいが）、例えば、竜巖では、「同志たちは、毎日、道端や公園に座ることを日常工作とみなしている」  
始末であった。<sup>(36)</sup>



このようにして、上からの情報はなかなか下に届かなかつたのだが、党内文書は、下から上への情報伝達もきわめて不十分であると繰り返し指摘している。一九三〇年夏、閩西ソビエト政府は、同政府が各地に送った各種の質問票は、すでに二カ月がたつのに、各県ソビエトがいずれも放っておき、まったく返送してこないで、同政府としては統計のとりようがないと嘆いている。<sup>(37)</sup>各県から報告が送られてこないことに業を煮やした閩西ソビエト政府は、一九三〇年七月、各県・区ソビエト政府が上級機関に対して月末報告を行うよう要求した。<sup>(38)</sup>だが、この指示に応じて、一カ月後に報告を寄せた委員会はごく少数にすぎなかつた。<sup>(39)</sup>そこで、閩西ソビエト政府は再度、同じ指示を発したが、一カ月後、報告を送ってきたのはやはりわずかであつた。「永定県ソビエトが経常的に報告を送ってきており、武北区ソビエト、上杭県ソビエト、連城革命委員会が報告を一度送ってきた以外、報告はない」という有様であつた。<sup>(40)</sup>

とはいえ、たとえ下から上に情報の伝達が行われたとしても、上級機関の反応は概して鈍かつた。一九三一年六月、閩粵贛省委は、すでに一二通の報告を党中央に送つたのに、党中央からは何の回答もないと不満を漏らしている。<sup>(41)</sup>党中央が地方から送られた文書を実際には受け取つていなかったのか、それとも受け取りながら放つておいたのかは不明だが、いずれにせよ地方党機関には不満がくすぶつていた。党中央が廈門市委員会に派遣した巡視員仲雲によれば、「市委は、この三カ月で一〇あまりの書簡を中央に寄せたのに、交通員の持つて来る文献は、全国的性質を持つ通告のほかは、福建工作に関する批評・指示はない、というのだ。市委の同志はいう。『中央の指導機関は、彼らに送られた手紙を読まないのだろう』。……私には、なぜ中央が地方党機関からの報告をこのように無視するのかわからない。……このような悪い関係では、地方の中央に対する信頼が減退してしまふ。<sup>(42)</sup>」

無視されたのは地方党機関からの通信だけではなかつた。さまざまな機関が折にふれて派遣した巡視員は、上

級機関が下級機関の置かれた状況や仕事振り、そして革命の現場に関する情報を得るための重要な手段のひとつであったが、巡視員を送ったからといって、彼の視察報告が政策決定にフィードバックされるとは限らなかった。党中央から派遣されたある巡視員は憤懣やるかたなく次のように書いている。「私はこの度、三カ月に渡って、一字たりとも〔中央から〕指示を受けていないし、〔提起した〕問題に対する回答をもらってもない」。ある場合には、巡視工作への送り出しは、懲罰の意味を含んでいた。そのため、巡視員に任命されるや、家に逃げ帰るものもいたのである。<sup>(44)</sup>

もちろん、ある使命を帯びて上級機関から派遣された人々自身に問題がある場合もあった。おそらく、国民政府軍の兵士に対する工作のために党中央から厦門に派遣された「特派員」は、「厦門に到着してから三カ月近く、まったく手がかりもつかめぬまま毎日洋服を着て大通りを歩き回っている。あるいは、夫人とともに歩き回っている。家ではしばしばマージャンをやっている。何とか方法を講じて兵士工作を軌道に乗せようとしな。だから、われわれは彼を中央に帰したのだ」。<sup>(45)</sup>

情報と同じように、金の流れも滞っていた。<sup>(46)</sup>特に、上から資金が降りてこないことは、地方党機関にとつてきわめて深刻な問題となった。後述するように、黨員たちが党費をめぐりに納めなかつたので、各県委員会はどこも慢性的な資金不足に陥っていた。そして、それを解決するほとんど唯一の手段が、地主、およびその家族の営利誘拐であった。営利誘拐は、以前筆者が調べた湖北省の多くの県委員会の主たる収入源だったと目されるが、<sup>(47)</sup>閩西でも事情は同じだったようにみえる。閩西の黨員の間では、営利誘拐は「最高道徳的工作」と呼ばれていた。<sup>(48)</sup>竜巖県委員会の報告によれば、一度誘拐が成功すれば、約三、〇〇〇元を手にすることができた。<sup>(49)</sup>これは一九二八年秋の時点での閩西特委の財政を約八カ月分も賄うことができる金額であったから、たとえ誘拐が嫌悪すべき匪賊の常套手段だとわかっていても、その誘惑は逆らいがたいほど大きなものであったに違いない。

以上のような党内交通の密度の低さは、情報の共有それ自体に対する無頓着振りとあいまって、下部機関が独自の判断と独自に動員した資源に拠って活動する余地を大きなものにしていたのであろう。党内交通の構造からみて、党機関は分散孤立しやすくなっていた。党中央と、省委員会は決してそれを容認しなかったが、実際には、県委員会以下は、かなりの程度分節化し、どこか清朝の統治構造を髣髴させるのだが、それぞれ高度な「自治」を享受していたのである。

### (3) 党員の価値と行動様式

次に、われわれは扱いがもつと難しい党員の価値と行動様式に目を向けよう。党員とは何者であるかを理解するためには、この点に関する考察を欠かすわけにはいかない。もっとも、一般党員が、ほかの誰かによって要請された政治的な意味合いをもつ回想録という形を取らずに、彼らの日常生活や主観的世界について記録を残していることはまずないので、この問題は指導者の目を通して党内文書に記された彼らの具体的な行動——それは「逸脱行動」として記録されやすい——から推測していくよりほかはない。その際、筆者が注目するのは、一言でいって、文化的境界の問題である。つまり、マルクス・レーニン主義の世界観や価値およびそれに基づく党組織が要求する規範と、伝統的な農民の世界観、価値、行動様式が出会ったところで、何が起きていたのかという問題である。党組織は、中国農民の大海のなかで、どの程度まで伝統的農民文化の空間に力強くくさびを打ち込み、独自の新たな文化的空間を切り拓き、それを拡大することに成功していたのだろうか。言い換えれば、党組織は、どの程度、新たな文化の培養器になることができたのだろうか。

党員の行動について、多くの報告書が繰り返し指摘している顕著な傾向がいくつかある。ひとつは、党員が会合に出席しようとしないうことである。とりわけ、一九二九年以前の党内報告を読めば、党員が会合に参加しない、

あるいは会合それ自体が開かれていないという記述にいたるところで出くわす。しかも、本人が欠席する場合、非党員である家族を代理に立てることが行われていた。閩西特委の文書はこう指摘している。「県委が会合を開く場合、委員が参加できないと、彼の弟（非党員）を派遣し、代わって県委員会に参加させている。県委書記も寛大にこれを許している」<sup>(50)</sup>。これが特定の県委による逸脱であったとは考えにくい。閩東の安溪中心県委の決議においても、次のような指摘がある。「同志でない者を絶対に支部会議、および一切の党の会議に参加させてはならない。……永春臨時県委は、同志でもなく、ましてや革命大衆でもない女性を会議に参加させ、記録を取らせている。そして彼女は党の組織状況および会議での決定を彼女の亭主（アナキスト）に告げているのだ」<sup>(51)</sup>。そうだとすれば、支部生活においては党員と非党員が、組織の構成員であるかないかをあまり意識することもなく、交じり合っていた可能性がある。すでに述べたように、党員の流動性が無視できない程度に達していたとすれば、そこに元党員も加わっていたかもしれない。

なるほど、時間の経過に沿って党内文書を読み進めていけば、一九三〇年頃から、「支部会議は以前と比べれば、定時に開催できる」<sup>(52)</sup>、「支部会議は定期的に開ける」<sup>(53)</sup>などと、会合の開催状況の改善を指摘する記述を見出すことができる。だが、そうだとしても、支部会議は革命の方向性や具体的戦術をめぐる積極的な討論の場ではなかった。ある文書によれば、「同志は会議に面白みを感じず、それを嫌がっている」<sup>(54)</sup>のであり、別の文書の記すところ、会議は形式主義に陥り、「キリスト教の礼拝や国民党の記念週と変わりはない」<sup>(55)</sup>のであった。また、顎豫皖根拠地と同様、党員が党費を納めようとしめない点もしばしば指摘されている。奇妙なことに、党費の徴収に責任を負う末端の幹部たちも、徴収には無頓着だったようにみえるのだ。閩西特委の報告によれば、「党費の徴収工作は非常にうまくいっていない。同志が払おうと払うまいと、支部はかまわない。毎回の党費の徴収は、徴収に責任を負う人間が何度も催促した後、やっと納めてくれる」<sup>(56)</sup>。その結果、すでに述べたように、

党機関は慢性的な収入不足に悩まされ、營利誘拐に活路を見出すことになるのである。

さらに、敵の攻撃に際して、真つ先に逃げ出す黨員の存在も何度となく記録されている。一九三〇年一二月、閩西根拠地の「首都」竜巖城が軍閥の軍隊によって占領された際、城内外の各ソビエト政府機関は「無条件に」逃亡し、四、〇〇〇人から五、〇〇〇人の大衆が後を追ったという<sup>(57)</sup>。一九三二年夏の福建省ソビエトの決議によれば、長汀県ソビエトの委員たちは匪賊の攻撃を前にして、すでに三度逃亡した<sup>(58)</sup>。福建省ソビエトの別の文書が記すところ、寧化県ソビエトのメンバーは、敵が来ると山に隠れ、敵が去ると、街に戻ってきて肉と酒を食らっている<sup>(59)</sup>。竜巖革命委員会も匪賊の攻撃を察知するや、戦わずして二度逃げ、その結果、同委員会主席の郭滴人——閩西でもっとも経験に富んだ革命家の一人——が解任された<sup>(60)</sup>。逃亡者のなかには、多くの機関責任者が含まれていた。寧化県の安業、中砂城、長汀県の童坊、新泉県の儒×新泉などの区では、主席、部長、労農検査部長、遊撃隊長、模範隊長が寝返ったのであった<sup>(61)</sup>。

逃亡者は敵の攻撃に直面したときだけでなく、困難な任務が与えられた際にも現れた。中央ソビエト政府の機関紙『紅色中華』の伝えるところ、一九三四年春、新たに拡大したソビエト区、および白区（国民党支配地区）との境界地域に、福建省ソビエトが派遣した工作グループ二〇〇名のうち一七〇人余が逃亡した<sup>(62)</sup>。中央ソビエト政府副主席の項英が、「閩西の黨員たちは、殺物を担ぐときにもっとも勇敢だという者がいる」と皮肉たっぷりに述べたのは、まさにこのような事情を背景としていた<sup>(63)</sup>。工作にほとんど関係なく、たんなる金や銃の持ち逃げをはたらく者も後を絶たなかった<sup>(64)</sup>。

もっとも、逃亡はいつもそれとはつきりわかる形をとったわけではない。それはしばしば、たんなる工作の忌避と区別がつかなかった。党中央から派遣された巡視員の述べるところ、「福建省ソビエトには、二六五名の工作員がいるが、逃亡した者、および休暇を取って久しく戻ってこないなど、逃亡と変わりない者が三〇名いる。

外へ工作に出かけた者が八〇名いるが、そのうち、かなりの部分は音信がない。<sup>(65)</sup>

このように、あまりにも豊富な事例を持つ「逸脱行動」を全体として眺めてみると、それらを「逸脱行動」として扱うより、むしろ、当時の黨員の——少なくとも一般黨員の——「標準的行動」であったと理解するほうが適切であるように思えてくる。厳格な規律に支えられた、どこまでも革命の大義に献身的なボルシェビキのイメージを彼らに重ね合わせようとしても無駄である。

誤解のないようにつけ加えておかなければならないが、人的・組織的にみて、黨員と非黨員（あるいは元黨員）との境界が、あまり明瞭なものではなかったとはいえ、黨員の生活が非黨員のそれと何の違いもなかったわけではない。党内文書には、農民が黨員になることよって生じた生活上のいくつかなの変化が記されている。閩西特委の文書によれば、黨員は大衆の間で「特殊な階級」としての態度を示し、「一切の言論と服装は大衆と違っている」のであった。<sup>(66)</sup> ある巡視員の記すところ、「竜巖の同志は多く金の婚約指輪をはめ、一般大衆よりも豪華に

振舞っている。党およびソビエトの一般責任者同志は、勝手に人から金を借り、多くは金額も不明である。<sup>(67)</sup> 幹部の地位を利用して金を借りる、あるいは金儲けをしている者がいるという指摘は資料に繰り返し現れている。

例えば、閩西ソビエト政府主席常務委員兼食料部長の林延年は、「上杭西二区の商人から金を二〇〇元まきあげ、同時に西二区ソビエトから五〇元を借りて処罰された」のであった。<sup>(68)</sup> 紅軍に米を高く売りつけて利ざやを稼ぐソビエト主席や、土豪から取り立てた罰金を着服するソビエト工作員の存在も指摘されている。<sup>(69)</sup>

農民が黨員証——すべての黨員に実際に交付されたかどうか疑わしいのだが——を手にかざすことによって生じたこれらの生活上の変化は、彼らの価値や行動様式の変化を意味するところか、むしろ継続を物語るように思われる。黨員となった農民について、われわれが見出すのは、多くの場合、手にしたささやかな権力を振りかざし、直接的な利益の確保に奔走する姿である。少なくとも、革命の大義に対する献身や、同志的結合や、自分が生活

を営む狭い場所を突き抜けた広い視野、あるいは自分が慣れ親しんだ文化と意図的に距離を置き、それを軽蔑する態度といった特徴を彼らの行動から見出すことは難しい。要するに、彼らは文化的にみて、もとのままにとどまっている。逆からいえば、党生活が、新しい世界観、価値、行動様式の効果的な培養器になっているとは認めがたいのである。これは、入党に際しての敷居の低さ、入党の事実を深く心に刻み込む儀式の欠如、党内での教育・訓練の不足、そして党員の流動性の高さを考えれば当然すぎる結果であった。

したがって、筆者がかつて顎豫皖根拠地について述べたことは、閩西根拠地についても十分妥当するように思われる。すなわち、党組織はその外延部分に、はつきりした文化的境界を備えていなかった。言い換えれば、農村において、明瞭な境界線によって区切られた独自の文化的空間を創出してはいないのである。そのために、まさに党が根を下ろそうとした農村において、農民の伝統文化は圧殺されるのではなく、マルクス・レーニン主義の文化とあらゆる形で混合することになったのである。

党員が何者であったかを考える際に、当時の農民たちの目に、党組織あるいは党員がどのように映っていたのか、また党員自身が自らの組織を中国社会に存在する他の集団と比較して、どの程度ユニークな集団だと考えていたかという点を付け加えておくのは有益であろう。農民の目から見て、おそらく党員は異質な人々ではなかった。ときに、党員は匪賊と区別がつかない存在であった。それは、一方で匪賊が紅軍を語り、農民を略奪したためであるが、<sup>(70)</sup>他方で、遊撃隊が白区に行つて略奪を繰り返したためであった。福建省ソビエトの文書によれば、「地方武装には、戦闘に勝つと匪区に攻め込み、むやみに捕らえ、むやみに奪い、むやみに殺すものがある。これらの事実について、われわれが得た報告は実に多い」<sup>(71)</sup>。党内文書が党員の逸脱行動に言及する際、ときに「土匪化」あるいは「土匪路線」という表現が使われたが、それは党活動が匪賊のそれと見分けがつかなくなっている事態を指していた。<sup>(72)</sup>党内文書には、党員が会党（とりわけ大刀会）の頭目と関係を持つとと試みていることを

示唆する記述も散見されることから、党が農民の目に匪賊のみならず、会党の一種と映じていたとしても不思議はない。<sup>(73)</sup>

党員たちは自らを何者であると感じていたのだろうか。彼らの少なくとも一部は、歴史に根本的な断絶を持ち込もうとする企てに参加しながら、過去と手を切ることがいかに困難であるかを至る所で思い知らされていた。実際、党内文書は、自分たちの行動が国民政府や匪賊と変わらないという繰り返し発せられた党員の嘆きの声を少なからず記録している。福建省ソビエトの通告は次のように述べる。「白色大衆をソビエトの政治的影響下にかちとることができないため、毎回、遊撃を行うとき、あるいは白色区を占領したとき、われわれの武装がむやみに物を奪うという行為が現れる。これでは白軍、団匪、土匪といかなる区別があるか。これはどれほど深刻な現象であるか！」<sup>(74)</sup>。同様の指摘は、党中央が派遣した特派員の報告に基づき、党中央が福建省委に与えた指示においてもみられる。「地方武装の数は少なくないが、いったん作戦となると事前に逃げ出すのでなければ、大半は銃声を聞くや後方に××〔原文二字不明〕する。さらに深刻なのは、赤区の境界地域で大衆のものをむやみに奪うことで、まったく土匪の行動に等しく、これはソビエト政権下では絶対に許せないことである」<sup>(75)</sup>。それだけではない。党員がソビエト機関を独占し、後者を事実上、党機関の付属物にしていることについても、彼らは国民党の「以党治国」との共通点を意識せずにはいられなかった。<sup>(76)</sup>さらに、大衆に対して官僚的に振舞うソビエト政府は清朝の「衙門」と何の変わりがあるか。<sup>(77)</sup>犯罪者に対して、ソビエトの法廷は一切の肉刑を廃止しているはずなのに、実際には、「国民党や軍閥の法廷と同じように」さまざまな肉刑が用いられているではないか。<sup>(78)</sup>このような自省的な言葉は何度となく発せられた。したがって、農民の目からみて、党は農村における既存の社会集団としばしば区別がつかなかっただけでなく、党員たちもまた自らの集団と他の社会集団との本質的差異に関する確信をしばしば失いかけたのであった。



もつとも、新しい社会の創造という目的とその実現のために取りうる手段との不適合という感覚に苛まれていたのは、党組織の階梯でいえば、県委員を中心として省委員会の一部を含む中位の人々（彼らの多くは地元から調達された知識人であり、学校教師が多くを占めていた）であつたかもしれない。上位に位置する党中央は、そもそも革命の現場で一般黨員がどのように振舞つていたかを十分に把握していたとは思われないし、下位に位置する幹部たちは、生存を確保することに忙しく、理念と革命の現実との整合性などほとんど問題ではなかつたに違いない。つまり、「苦境に陥ると、いつも反対していた古い倫理にはまつてしまうのはどういうわけだろうか」という苦悩は、革命の理念と現実の狭間に立たされ、両者を媒介する役割を担わされた人々に特有のものであつたと考えられる。

要約しよう。厳格な組織を求めた党中央の意図はほとんど裏目に出た。革命根拠地における現実の党組織は、入党の際の資格審査が緩やかであつた（意図的にそうしたのではなく、事実上そうなつていた）ことから、外部に対して比較的高い開放性をもつことになつた。加えて、党内交通が貧弱であつたために、各単位が垂直的にも水平的にも分散孤立しやすく、全体として低い凝集力しかもつことができなかった。さらに、構成員の流動性が相当程度高く、そのために人的にも文化的にも境界が曖昧であつた。

したがつて、革命根拠地における党組織の現実の作動様式を、党規約や党中央の路線や政策や通告から判断しようとするれば、われわれはきわめて滑稽な過ちを犯すことになるだろう。レーニン主義的な「厳格な」組織は、党中央の指導者の観念のなかにのみ存在しており、根拠地における県委員会以下の党組織の現実はまったく別物であつた。しかも、党中央がコミンテルンの圧力を受けて「左」に傾いているだけに、いつそう意図としての「厳格な」組織と、農村の革命現場における現実としての「散漫な」組織の対照は著しいものとなるのである。こうして、李立三、王明といったきわめて権威主義的に振舞う党中央、およびその代理人をつとめる省委員会（福建

省委員会の場合、国民党による弾圧を受けて、しばしば機能を停止していた、というより機能停止が常態であったが）、とかなり自律的で勝手に振舞う県委員会以下とが一種の二重構造を形作って並存することになる。

なぜ革命根拠地においては、党中央の意図とはほとんど正反対の特徴をもつ組織ができ上がったのだろうか。理由の一部は、根拠地の置かれた歴史的・構造的諸条件に根ざしている。広大な中国大陸で、電話や電報といった近代的通信手段に頼ることなく、しかも国民党による執拗な捜査の目をかいくぐって、党中央と地理的に隔絶された根拠地が、あるいは根拠地同士がどのように緊密な連絡を行うことができたのだろうか。<sup>(80)</sup>

また、軍閥と軍閥、軍閥と国民党、国民党と共産党、共産党と匪賊といった具合に、いくつもの抗争が重なるこのうえなく暴力的な社会的・政治的環境のもと、しかもさまざまな病原体が蔓延しているにもかかわらず、それらに抗する術を知らない農村で、どうすれば党員を死や病気に直面させることなく組織の継続性を確保することができたのだろうか。

そのうえ、おそらく農民たちは、地縁・血縁に基づく絆とは区別され、それを軽蔑しさえするような一定の組織原理に基づく同志的結合による「厳格な」組織などというものを観念したことはなかった。言語の違いもまた異なる地点と人々を緊密に結びつけようとする際の、大きな障害となった。「廈門人が福州に行く」と別の国家だと感じる<sup>(81)</sup>とすれば、たとえ福建省内といえども、有能で経験に富んだ幹部を、ある地点から別の地点に移すことは容易ではなかったのである。これらの歴史的諸条件のもとでは、いかなるイデオロギーと制度的青写真に基づく組織であれ、共産党の組織とある程度同じ運命を辿ることは避けられなかったであろう。したがって、われわれは共産党組織の「散漫さ」を、たんに組織の「幼さ」から来る諸傾向、いかえれば組織の成長とともに、やがては自ずと克服される諸傾向とみなすべきではない。そうした特徴が歴史的・構造的（あるいは生態学的）諸条件に根ざしているかぎり、その克服は決して容易ではなかったと想像できるのである。

だが、理由の他の一部は、明らかに党自身の選択のなかに見出すことができる。もし、党中央が党員の量的拡大に対して、質的充実をはっきりと優先させる方針を一貫して採用していたならば、党員の流動性はこれほどまでにならなかったかもしれない。加えて、一九三一年と一九三三年の二度に及ぶ大掛かりな肅清の波がなければ、党員の流動性はずっと小さなものにとどまっていた可能性がある。現在の中国の文献が認めるように、当時の共產党が、たんに「社会民主党」なる組織の幻影を見ていたのであつたなら、内紛は回避することが可能だつたかもしれない。結局のところ、党中央の意図にあくまでも忠実な、大衆に広く深く浸透した厳格な組織を性急に作り上げようとしたことが、かえって「散漫な」組織の形成に導く結果となつたのであつた。だが、皮肉はこれでは終わらない。この「散漫な」組織は、後で述べるように、革命運動に一定の制約を課すと同時に、生命力をも付与した可能性があるのである。

- (1) 「中共閩西特委關於組織問題決議案」(一九三〇年二月二八日)、『選編』上、五八〇頁。
- (2) 「中共福建省委第五次執委擴大會關於士兵工作決議草案」(一九三一年二月二八日)、『福建文件』(省委文件一九三一年—一九三四年)、一〇二頁。
- (3) 例えば、「竜巖团组织問題草案」(一九三〇年)、『福建文件』(团组织文件)、一二九頁を参照のこと。
- (4) 「閩西工作報告」(一九二九年八月二日)、『福建文件』(閩西)、一一二頁。
- (5) 「中共閩西特委報告第一号」(一九三〇年二月二九日)、『福建文件』(閩西)、二二五頁。
- (6) 例えば、新党員に対する審査が不十分だと指摘しながら、「閉門主義」(セクト主義)に陥ることを戒める党中央の巡視員の主張を参照されたい。「肖××巡視福州報告」(一九三三年一月一五日)、『福建文件』(省委文件)、三八八頁。
- (7) 「羅明給中央組織部信」(一九三二年四月一日)、『福建文件』(省委文件一九三二年—一九三四年)、一三六一—一五一頁。

- (8) 同右、一三六頁。
- (9) 例えば、「中共閩西第一次代表大会決議案」（一九二九年七月）、『福建文件』（閩西）、六六頁を参照のこと。
- (10) 「流氓問題——紅四軍前委閩西特委連席會議決議案」（一九三〇年六月）、『選編』中、五一—五十四頁は、共産党の流氓に対する一九三〇年以前とそれ以後の接近法の違いを知ろうと重要な文書である。この文書以後、流氓は少なくとも方針の上では協力相手ではなく、打撃の対象となった。
- (11) 例えば、「竜巖团组织問題草案」（一九三〇年）、『福建文件』（团组织文件）、一三〇頁を参照のこと。
- (12) 「組織問題決議案」（一九三〇年九月一日）、『福建文件』（团组织文件）、三三頁。この文書は、他の文書と同様、このような階級的多様性こそが、団内のさまざまな問題——享楽主義、保守主義、金銭主義、紅軍に加わろうとしないう態度など——の根源だと指摘している。
- (13) 「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一月二十九日）、『福建文件』（閩西）、二二七頁。
- (14) 「中央巡視委員仲雲關於福州中心市委工作狀況的報告」（一九三一年七月二十五日）、『福建文件』（省委文件一九三一年—一九三四年）、三〇一—三〇二頁。
- (15) 凱豊（張愛萍）「蘇区团的組織狀況与我們的任務」（一九三三年八月）、閩粵贛湘鄂北路勦匪第三路軍編輯『赤匪反動文件彙編』第一冊、台北、一九三五年六月、二九九頁。なお、この文書は『張愛萍軍事文選』北京、長征出版社、一九九四年、には収録されていない。
- (16) 前掲『福建省組織史資料』二六、二七、六二、六三、六四、一三五—一三七頁。
- (17) 張昱「福建鼠疫防治經過」、『福建文史資料』第二五輯、一九九一年、一九五—一九六頁。
- (18) 死体の処理と伝染病との関連については、「富田一帯可怕的伝染病発生」、『紅色中華』第五期（一九三二年一月一三日）を参照のこと。
- (19) 「我們要怎樣來預防瘟疫」、『紅色中華』第九期（一九三二年一月一日）、および「小常識」、『紅色中華』第一三九期（一九三三年一月二十九日）を参照のこと。
- (20) 亮平「在新的形勢下徹底轉變福建省蘇的工作（一）」、『紅色中華』第一五七期（一九三四年三月三日）。
- (21) 「我們要怎樣來預防瘟疫」、『紅色中華』第九期（一九三二年一月一日）。

- (22) 金沖及主編、村田忠禧・黃幸監訳『毛沢東伝』上、みずす書房、一九九九年、一九五―一九七頁。コメントンは、このとき毛沢東が病死したと信じて、のちに機関誌に訃報を掲載することになる。
- (23) 同じ理由で、敵軍もまた多くの兵士を病気で失っていた。共産党の資料では、劉和鼎の軍は千名を病のために失ったと記されている。「閩西出席全国蘇代会代表的報告」(一九三〇年五月一八日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三〇年)、一二二頁。
- (24) 「中共閩西特委報告第五号」(一九三〇年一月一日)、『福建文件』(閩西)、一六一―一六二頁。同様の言明は、「閩西報告的補充」(一九二九年一月三〇日)、同右、四四頁にも見出すことができる。
- (25) 張国燾『我的回憶』第三冊、北京、東方出版社、一九九一年、九六頁。
- (26) 「中華ソビエト中央政府成立二周年記念報告」(一九三二年一月七日)、『資料集』第六卷、一四二―一四三頁。
- (27) 「中共福建省委關於一九二九年出版品統計」(一九二九年一月)、『福建文件』(補遺)、七二頁。ここには福建省委が同年に出した出版物のリストが掲載されているが、「六全大会組織問題草案」の出版の日付は五月一二日となっている。
- (28) 「閩西蘇維埃政府通告新編第十号」(一九三〇年八月一日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三〇年)、二一七頁。
- (29) 「中共閩西特委給南方局報告」(一九三〇年二月七日)、『福建文件』(閩西)、二三八頁。
- (30) 福建省委員会の激しい内部対立に伴う混乱については、例えば、「中共福建省臨時省委關於省委擴大會議給中央的報告」(一九二八年七月一日)、『福建文件』(補遺)、四六一―四八頁を参照のこと。
- (31) 「中共福建省委致中央信」(一九三二年三月二七日)、『福建文件』(閩西)、一三二頁。この事件後、福建省委は福州に移転することを余儀なくされた。
- (32) 「福建省蘇機閩中一種官僚腐氣」、『紅色中華』第三二期(一九三二年九月六日)。
- (33) 「肖××巡視廈門報告」(一九三三年一月二日)、『福建文件』(省委文件一九三二年―一九三四年)、四〇三頁。
- (34) 「中共安溪中心县委宣傳部印發的革命口号及宣傳通知」(一九三三年八月一日)、『福建文件』(各县委文件)、一五三頁。

- (35) 「中共閩西特委報告第一号」(一九三〇年一月二九日)、『福建文件』(閩西)、二二五―二二六頁。
- (36) 「閩西工作報告」(一九二九年八月二二日)、『福建文件』(閩西)、一一〇―一一一頁。
- (37) 「閩西蘇維埃政府通告第七号」(一九三〇年七月八日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三〇年)、一八八頁。
- (38) 「閩西蘇維埃政府通告第六号」(一九三〇年七月五日)、同右、一八七頁。
- (39) 「閩西蘇維埃政府通告新編第十一号」(一九三〇年八月一七日)、同右、二二〇頁。
- (40) 「閩西蘇維埃政府通告第四号」(一九三〇年一月一日)、同右、二四一頁。
- (41) 「中共閩粵贛省委報告第十三号」(一九三一年七月一日)、『閩粵贛』(一九三一年―一九三三年)、二三四頁。
- (42) 「中央巡視員仲雲給中央報告」(一九三一年一月五日)、『福建文件』(省委文件一九三二年―一九三四年)、三三〇頁。
- (43) 「肖××巡視福州報告」(一九三三年一月五日)、同右、四〇〇頁。
- (44) 「幾個黑板上的人物」、『蘇区工人』第一五期(一九三二年一月二〇日)。
- (45) 「肖××巡視廈門報告」(一九三三年一月二二日)、『福建文件』(省委文件一九三二年―一九三四年)、四〇六頁。
- (46) 例えば、一九三一年八月、党中央から派遣された巡視員は、党中央から福建の党に対して与えられるはずの四月、五月、七月の三カ月分の経費が支給されていないと記している。「中央巡視員巡視福建情況報告」(一九三一年八月三日)、同右、三二七頁。
- (47) 「中共閩西特委關於上杭、武平、長汀情況報告」(一九二八年七月二六日)、『福建文件』(閩西)、二五頁。
- (48) 「中共閩西特委關於各県情況給省委的報告」(一九二八年一月二二日)、『福建文件』(閩西)、三八頁。
- (49) 同右。もっとも、この時期の党機関の財政状況を把握することには、特別の困難が伴う。というのも、多くの地方党機関が「予算も決算もない」という有様だったからである(「中共閩西特委報告第一号」(一九三〇年一月二九日)、『福建文件』(閩西)、二二三頁)。ある報告は、閩西ソビエト政府の財政状況を「無政府状態」と表現している(「徐萍向党中央報告」(一九三二年一月四日)、『閩粵贛』(一九三〇年―一九三二年)、一八頁)。
- (50) 「閩西工作報告」(一九二九年八月二二日)、『福建文件』(閩西)、一一一頁。
- (51) 「中共安溪中心县委關於当前工作的決議」(一九三三年八月二〇日)、『福建文件』(各県委文件)、一七三頁。

- (52) 「中共閩西特委關於組織問題決議案」(一九三〇年二月二八日)、『選編』上、五七九頁。
- (53) 「中共閩西特委報告第一号」(一九三〇年一月二九日)、『福建文件』(閩西)、二二八頁。
- (54) 同右。全く同様のことが、共産主義青年団の會議についても指摘されている。例えば、「組織問題決議案」(一九三〇年九月一九日)、『福建文件』(团组织文件)、三四頁を参照のこと。
- (55) 「中共閩西特委關於組織問題決議案」(一九三〇年二月二八日)、『選編』上、五七九頁。
- (56) 「中共閩西特委報告第一号」(一九三〇年一月二九日)、『福建文件』(閩西)、二二九頁。同様の指摘がなされている資料として、「中共閩西特委關於組織問題決議案」(一九三〇年二月二八日)、『選編』上、五八〇頁を参照のこと。閩東でも状況は似通っていた。莆田県委の報告によれば、同県委の管轄下にある八つの区と一つの特別支部のうち、党費をまったく徴収していないものが二つ、数ヶ月徴収していないものが一つ、毎月定期的に徴収できないものが一つあった。「中共莆田中心県委給福州中心市委的工作報告」(一九三三年一〇月一七日)、『福建文件』(各県委文件)、二〇〇—二〇三頁。
- (57) 「閩西蘇維埃政府通告第十一号」(一九三〇年二月二一日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三〇年)、三一六頁。
- (58) 「福建省蘇維埃政府第二十四次主席団會議決議案」(一九三二年八月二二日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三二年—一九三三年)、三〇七頁。これによって、長汀県ソビエトは党中央から「ソビエトの恥」と厳しく叱責されたのであった。次の文書も参照されたい。「中共給福建省蘇的指示」(一九三二年八月一七日)、『選編』下、二一〇頁。
- (59) 「福建省蘇維埃政府通令第二十三号」(一九三二年八月四日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三二年—一九三三年)、二九六頁。
- (60) 「福建省蘇維埃政府通令第三十一号」(一九三二年九月七日)、『選編』上、三三三—三三四頁。
- (61) 「福建省蘇維埃政府第四次執委拡大會議決議案」(一九三三年八月)、『選編』上、三八九頁。
- (62) 亮平「在新的形勢下徹底轉變福建省蘇的工作(一)」、「紅色中華」第一五七期(一九三四年三月三日)。
- (63) 「閩西的一般政治情形」(一九三一年一月)、『福建文件』(閩西)二五三頁。
- (64) 例えば、「中共閩西特委關於各県情況給省省委的報告」(一九二八年一月二二日)、『福建文件』(閩西)三六頁。

「中共福建省關於七二五反軍閥戰爭示威報告」（一九三〇年八月二十六日）、『福建文件』（補遺）、九二頁には、廈門における暴動で、二人の黨員が塩稅局に押し入った後、金を持ち去った例が記されている。ついでにいえば、福建省ソビエト機關内においてさえ、金錢や銃がなくなることがあった。亮平「在新的形勢下徹底轉變福建省蘇的工作（一）」、『紅色中華』第一五七期（一九三四年三月三日）。

(65) 同右。

(66) 「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一月二十九日）、『福建文件』（閩西）、二二八頁。同様の点を指摘する報告として、「徐萍向党中央報告」（一九三一年一月四日）、『閩粵贛』（一九三〇年—一九三一年）、一八頁がある。

(67) 「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一月二十九日）、『福建文件』（閩西）、二二七頁。

(68) 「閩西蘇維埃政府布告第十四号」（一九三〇年六月二日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、一七四頁。

(69) 「擁護紅軍為着發洋財」、『紅色中華』第六五期（一九三三年三月三〇日）。この郷ソビエト主席は、大衆から米を一二斤一元で買い付け、紅軍に一二斤一元で売ったという。ついでにいえば、紅軍内部でも金儲けに忙しいものがあるという。「閩西的一派政治情形」（一九三〇年二月二十九日）、『福建文件』（閩西）、二五六頁。

(70) 「辺区団匪假冒紅軍行劫」、『紅色中華』第一〇二期（一九三三年八月一六日）。

(71) 「福建省蘇維埃政府通令第二十三号」（一九三二年八月四日）『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三一年—一九三三年）、二九六頁。

(72) 「この言葉は、閩西に限らず、福建省の党組織全体について語る際にも使用された。もつとも極端な例は、閩東の福安中心県の状況であった。同県委の決議は次のように記している。「遊撃隊の第一支隊は、北区の闘争する大衆によつて嫌悪されている。遊撃隊の指導と生活もよくなり、完全に土匪化している。第三支隊はといえば、大衆闘争と工作区域から離れ、土匪のほうへ行つてしまい、完全に消滅してしまつた。……われわれは福安に、党支部、区委、県委の組織を見出すことができない。ただ黨員、区長、隊長、土匪の頭目、土匪の成員を見出すだけである。土匪路線だ！」（「中共福安中心県委決議」（一九三三年二月三日）『福建文件』（各県委文件）、二三一—二三二頁）。

(73) 例えば、「肖××巡視福州報告」（一九三三年一月一五日）、『福建文件』（省委文件一九三二年—一九三四年）、三九六頁を参照のこと。



- (74) 「福建省蘇第二十四次主席団會議決議案」(一九三二年八月二二日)、『選編』下、二一六頁。
- (75) 「中央給福建省蘇の指示」(一九三二年八月一七日)、『選編』下、二一〇—二一一頁。
- (76) 「福建省蘇区党第一次代表大会蘇維埃工作決議草案」(一九三二年二月二八日)、『福建文件』(省委文件一九三一年—一九三四年)、一八三頁。
- (77) 同右。
- (78) 「福建省蘇維埃政府訓令裁字第二号」(一九三二年八月二七日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三〇年)、三一五頁。
- (79) 「陳公光、林善給吾愛的信」(一九二六年一月二四日)、『福建文件』(補遺)、一八頁。
- (80) 電話線の敷設は、たしかに閩西の党指導者が思い描いていた計画の一部であった。「永定県第一次各区軍事責任會議」(一九三〇年一〇月三一日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三〇年)、二五八頁。だが、この計画が実現したかどうかはきわめて疑わしい。むしろ、閩西における情報・通信網は、文献を届ける「赤色郵便局」や、交通の要所に設けられ、政府工作員が宿泊できる場所である「紅色旅館」に代表されるような、人に依存した仕組によっていたのである。「福建省蘇維埃政府通知第四号」(一九三二年四月八日)、『福建文件』(蘇維埃政府文件一九三一年—一九三三年)、二四一頁。
- (81) 「中央巡視員報告」(一九三一年八月三日)、『福建文件』(省委文件一九三二年—一九三四年)、三一九頁。
- (82) 中共中央党史研究室『中国共産党歴史』上巻、北京、人民出版社、一九九一年、三〇七頁。